The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上方文藝研究の現在（七）上方読本を読む会
Author(s)	飯倉，洋一
Citation	上方文藝研究. 2010, 7, p. 71-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47711
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

上方文藝研究の現在（七）

上方読本を読む会

本研究会が発足したのは二〇〇二年四月である。筆者が大阪大学に赴任して一年経ち、そろそろ院生たちと上方の読本でも読もうかな、と思って始めた。授業の演習と違って、参加したい者だけが参加し、たっぷりと議論のできる研究会をやりたかったのである。

当初の参加者は大阪大学の大学院生五名と学部四年生四名、それに、筆者が非常勤で出講していた奈良女子大学の大学院生二名（久岡明穂さん・的場美帆さん）と神戸大学大学院生（木越俊介さん）一名、筆者を含めて十三名であった。

作品は木越さんの提案で都賀庭鐘の『莠句冊』に決まる。まさかこの作品を五十四回、八年間に亘って読み続けることになろうとは、その時は予想もしなかった。

二〇〇二年度はほぼ月一度で十回行われたが、その後は、年六、七回程度となった。これは筆者が様々なプロジェクト等に関わって時間が取りにくくなったことも一因だが、担当を名乗り出る者がなかなかいないという事情もあった。教員だけではなく、昨今の学生は皆忙しいのである。

研究会は、大阪大学豊中キャンパスにおいて行われる。土曜日の午後三時からというのは決まっている。担当者が演習風に準備をしてきて、資料を配付し、二時間半から三時間、議論する。終わったあとは、有志で飲みに行くことが殆どである。年度はじめには、新会員が加入するので歓迎会を、年度末には、卒業・修了・満期退学などで会を去る人の惜別会を行う。

八年間続いているので、参加者はかなり出入りがあるが、少ないときには数名、多いときには二十名近くで読んだ。現在は比較的参

加者が多い。一度でも参加したことがある人を数えると、四十七名いた。その中には、近世文学専攻者だけでなく国語学・中世文学の研究者もいた。「聴かせていただくだけでもいいですか」と言っているうちに、いつの間にか担当させられるという光景も何度かあった。ただ学部生には担当してもらった記憶はない。進んで担当を申し出るような積極的な学生の登場を心待ちにしている。

さて『莠句冊』は読書会に相応しい難物であった。そのおかげで、議論はなかなか活発である。この研究会は発言しやすいという声もある。参加者は大抵一度は発言する。本文の意味が通らないところは、すっきりと腑に落ちるまで議論し続けるというのが通例で、何時間も議論をした結果読み解けた時の悦びは言いようのないものである。本文の意味がわからないままに先に進むことは極力しない。

この研究会での発表を元にした論文も刊行された。片山拓朗さんの「『莠句冊』第五話小考」（本誌第三号、二〇〇六年五月）である。大阪大学大学院博士前期課程に入った時、『雨月物語』の研究を目指していた片山さんは、『莠句冊』で修士論文を書いた。その一部が論文となったのである。京都近世小説研究会では久岡さんが「南方の旧家―『莠句冊』第七話考―」（二〇〇八年二月二三日）という発表をした。だが全般的には、具体的な研究成果として実を結んだ例が少なかった。これは反省材料である。

中国白話小説と近世小説の関係を専門的に研究している中村綾さんが参加しはじめると、白話語彙に関する調査や指摘が多くなったように思う。国語学の米田達郎さんや斎藤瑛子さんが担当してくれた時には、国語学的な問題が取り上げられた。そして近年、金沢大学の大学院生たちがはるばると列車に乗って来阪し、出席してくれるようになって、俄然研究会が賑やかになり、活性化したのではないだろうか。

ある時期、『莠句冊』を中断して他の作品を読もうという案もあったが、結局最後まで読み通すことになった。いま思えば、この判断は良かったのではないだろうか。

いよいよ『莠句冊』も終わりに近づくというころ、この作品を読むことを提唱しながら発足後すぐに山口に転出した木越俊介さんが、突然研究会に復帰宣言をし、最終回の五十四回目に登場した。心機一転、新しい作品輪読から参加したいというのである。たまたまこの日は、別件で阪大に用事があった木越治さんが飛び入り参加、常連の木越秀子さん（金沢大学院生）ともども、ファミリーで参加された。写真はその時のものである。

新たな作品として俊介さんが提案したのは『忠臣水滸伝』。「上方読本を読む会」なのに京伝というのはおかしいという声もあったが、そこを敢えて読むのもいいのではないか。そのように決まり、初回は俊介さんが担当することになった。

幹事役は毎年変わる。二〇〇九年度の幹事高濱海穂さんの提案で輪読終了記念として、作品ゆかりの場所にハイキングに行くことになった。行き先は、やはりというべきか、吉野。三月末、まだ肌寒さの残る時季、開花しはじめたばかりの桜を眺めながら、吉水神社、後醍醐天皇陵などを訪れた。

研究会はいつでも開かれている。ご連絡は、飯倉のメールアドレス（iikura@let.osaka-u.ac.jp）へ。

（飯倉洋一）